

人工物プログラム科学の認識論

千里金蘭大学短期大学部 三石博行

吉田民人は近代科学の秩序原理の代わる新しい現代科学の秩序原理を説明する基本概念にプログラムという概念を持ち込んだ。人間社会学分野で、提案されているプログラムという概念のメリットを、ここでは点検したい。

吉田民人のプログラム(記号集合形態)の概念は大きく二つの異なる世界からなる。一つは、遺伝子、脳神経生理作用などを構成する「シグナル記号の集合としてのプログラム」で、もう一つは、意識や精神活動、言語活動、社会文化環境を構造化している「シンボル記号の集合としてのプログラム」である。

生物系も文化系も共に記号集合形態によって構成されていると考え、それらは、進化の履歴を登録し、保存し、累積したプログラム構造を持っている。生命と同じく文化においても、個体、共同体、共同幻想、自我を保存し続けようとする力(プログラムの機能)が作用している。つまり、個体は、その環境要素を取り入れ、環境変化に順応するために、形態変化さす自己組織的機能を持つ。その機能によって環境条件に選択され、変化(進化)しながら生存し続けることが出来る。その作用は獲得遺伝子、抗原抗体反応、個体の環境適用反応、環境に造られ環境を作る人間的な行為を生み出している。また、利己的遺伝子、種族保存の法則のように、個別の生命や文化の活動は、生成、維持、変容、消滅の過程がプログラムとして組み込まれ、全体として同種の生命活動や同一の文明構造の持続を生み出している。

ここで、広範囲に定義されたプログラム概念が、あるアナロジーを前提にして成り立っていることに注目する。確かに、遺伝子と言語は、これまでの物理主義的なモデルでは説明されない。共に記号と記号の関係、記号集合の特性とよばれる新しい関係が成立している。しかし、遺伝子学や免疫学の実証的な研究によって明らかにされ、また、文化人類学や社会人類学のフィールドワークによる文化記号の解明作業によって分析されてきた。1980年代からフランス社会学はE.モランなどによって社会文化現象を分子免疫学的なモデルで解釈する試みや、フランシスコ・ヴァレラによる自己組織系のモデルによる解釈がなされた。こうした流れは、人間社会学への物理主義の影響を少しずつ取り除いて行った訳であるが、果たして、この解釈モデルのアナロジーを正当付ける理論が検証されたかは問題である。熱力学第二法則のエントロピーの概念に似て、プログラムの概念は、生物、情報、文化記号学、社会システム論に至るまで、その適用範囲を広げている。しかし、それは、決して一つの理論がすべての分野を説明したのではなく、あたかも、異なる世界に共通するプログラム科学と言われる現象が存在していると考えられるほうが正しい。

社会学はその形成以来、歴史的に生物学モデルの影響を受けている。今日の社会学が分

子生物学の影響を現在受けていることは、決して偶然ではない。社会と身体が共に有機体であること、構造と機能の相補性、自己組織系システム、環境の相互関係などが挙げられる。今日、プログラム科学という呼ばれ方で、免疫遺伝学モデルが社会文化現象の解明に活用されている。吉田民人が生物学と社会学を共にプログラム科学と解釈したことは、科学理論の発展の経過から考えると、物理主義を批判する科学認識論の流れの中で、当然生まれるべき理論構築の過程である。しかし、その場合にモデル拡張の権利問題を解決しなければならない。言い換えると、現象の類似性を感じる解釈意識の次元の認識構造が哲学的にはブラックボックスとしてある。哲学的には、他の分野で検証された理論を前提にして語ることは出来ないという厳密な態度を前提にするしかない。言い換えると人工物プログラム科学一般論は存在しない。何故なら、シグナル記号の集合として解釈した生物系プログラム概念を、現在の分子免疫学の課題が進展するか、分子免疫学者が活用するかは疑わしい。吉田のプログラム概念は、むしろ、人文社会系の科学へ大きな影響を与えていることに注目しなければならない。一般論的なプログラム概念ではなく、人工物プログラム概念こそが、吉田理論の課題となる。